

わ

が

街

わ

が

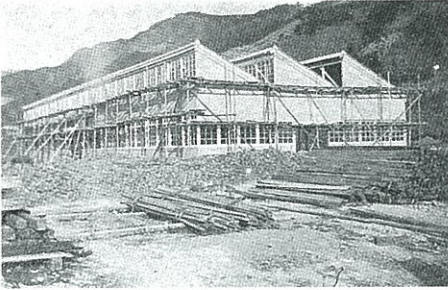
故

郷

(株)ジェイテクト国分工場と柏原市

国分工場の建設

当社は、昭和11年に大阪府南河内郡国分村で国分工場の建設に着手しました。昭和8年に建設された中川工場(大阪市東成区中川町)が、敷地も狭く生産能力も限界に近づいている中、急増する需要に対応できる大量生産が可能となるような工場が必要となり、国分工場の建設となりました。

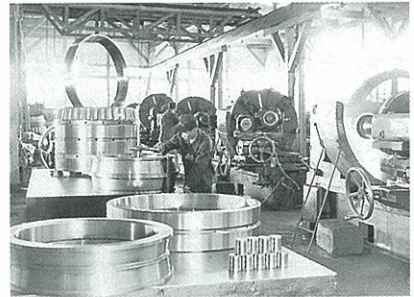


建設中の国分工場

国分工場は、大阪と奈良の県境に近い大阪府南河内郡国分村(現大阪府柏原市)に、約10万㎡(3万坪)の土地を買収して建設された当社ベアリング事業の主力工場です。国分は付近に5世紀頃からの古墳も残っているなど歴史の古い地域であり、律令制下には河内国の国分寺が置かれ、これが地名の起こりとなっています。中世以降は交通の要地として栄え、江戸期には経済の発達につれ、大坂(大阪)と大和の物資の移動

が増えたため、その中継地として発展しました。

現在の国分工場には、ベアリング事業の本拠スタッフ、技術、生産部門の従業員を合わせると約2000名が在籍しており、中型サイズの自動車用ベアリングから直径7mのトンネル掘削用の超大型ベアリングまで、多品種のベアリングを生産しています。最近では地球環境への関心の高まりから、風力発電用の大型ベアリングの注文を多く受けております。また、定期的に地元小学生や地域住民の方を招いて工場見学会を実施するなど、地元柏原市からあらゆる面で信頼される工場を目指しております。



昭和30年頃の大型軸受の研磨・組立風景

古墳文化にみる柏原の旧跡

柏原市には、3世紀後半から4世紀(応神・仁徳時代)にかけての玉手山古墳群、松岳山古墳群、安堂古墳群があります。玉手山古墳は全山が古墳になっており、大きいものは前方後円

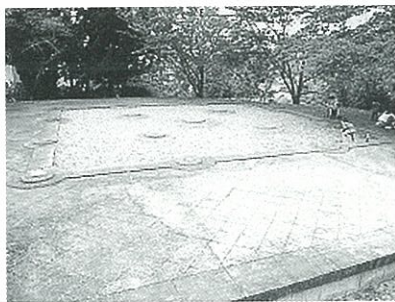
墳の後山古墳で全長150mもあります。松岳山古墳群で現在残っているのは、松岳山古墳（全長120m）1基だけになっています。最近注目を集めているのは安堂山古墳群で、前方後円墳と円墳が現存しています。

また、6世紀から7世紀に入ると古墳文化も変化し、（後期古墳）前方後円墳のような巨大な古墳は姿を消し、横穴式石室といった開口部を持つ石積みの石室が多く見られ、大和川に面した平尾山西南山麓にある高井田横穴では線刻壁画が30基発見されています。このように歴史的にも重要な古墳が多く現存しています。

交通の要所の竜田道と国分寺

柏原は大和川が大和国から河内国へと抜けるところにあることで、昔から交通の要所として栄えてきました。水運と陸上交通とがあって、大和の竜田から山越えて亀の瀬峠を越えて河内に入る陸路が竜田道と呼ばれています。

奈良時代に聖武天皇の発願によって建立された河内国の国分寺は、竜田道で大和から河内に入るとすぐに見える高台に建っていました。現在では廃寺となっておりますが、昭和45年の発掘調査で七重塔跡に切石を積んだ基壇や石段が、ほぼ完全な形で残っていることが確認されています。



国分寺跡

名産のぶどう栽培

柏原ぶどうは、一名「河内ぶどう」あるいは、「堅下ぶどう」と呼ばれています。栽培の始まりは古く、今から300年前（宝永3年）と言われており、明治20年頃までは家屋の日陰樹として、わずかに栽培されている程度でした。

現在栽培されている甲州ぶどうは、明治11年頃に、大阪府が沢田村（現藤井寺市）に設けた指導園で育成した苗木を、堅下村平野（現柏原市）の中野喜平氏が栽培に成功したのがきっかけになって普及しました。



ぶどう栽培

大正時代は、第1次世界大戦後に好景気が続き、ぶどうの需要が増大しました。当時は交通事情が悪かったので、他府県産ぶどうの入荷量が少なく高価に販売されたので大增殖しましたが、その結果、生産過剰になったため大正10年に出荷組合を設立して他府県へ貨車で出荷販売し、昭和3年～10年には大阪府は全国で第1位のぶどう産地に発展しました。

その後第2次世界大戦中、食糧難や労力、肥料などが不足したため減反されましたが、電波兵器に必要な酒石酸を製造する目的でぶどう栽培は続きました。

大戦後は年々復興するものの、昭和30年代から台風や高度経済成長の影響を受け、また他府県産ぶどうの入荷もあり農家の経営面積も縮小されました。

現在は、大阪中央市場や他府県に出荷販売している一方、都市住民のための観光ぶどう狩りや、ぶどうの宅配便などで発展しています。また、ぶどうを原料としたワインも「河内ワイン」のブランドで全国へ出荷しており、当社は国分工場へ来られたお客様へのお土産としても活用しています。



お土産の河内ワイン

(株式会社 ジェイテクト)

